

日本語指導が必要な中学生が在籍する学級での英語科の授業における課題

森口菜美 (京都教育大学大学院生)

1. 研究の背景と目的

筆者はボランティア先の学校で出会った日本語指導が必要な児童生徒の様子から、そのような児童生徒が周りの児童生徒と同じように在籍学級での学習活動に参加していくのは容易なことではないと考えた。中学校の英語科の授業において田中(2015)は、日本語を学びながら同時に英語を学ぶことには困難があると指摘している。児童生徒の言語的背景が多様化していることから、不十分な日本語を媒介して児童生徒が英語を学ぶということが珍しくなくなっている。しかし、そのような児童生徒への英語科の学習支援に関する研究や授業実践の報告は校種にかかわらず、ほとんどない。本研究では、日本語指導が必要な中学生、中でも特に困難が大きいと思われる、日本語・英語ともに非母語の中学生が在籍する学級での英語科の授業における課題と、それを克服するためにどのような工夫や支援がなされているか、明らかにしたい。

2. 日本語指導が必要な中学生が英語を学ぶ上での障壁

本章では、日本語指導が必要な中学生が英語を学ぶ上での具体的な障壁を先行研究等から明らかにし、その克服方法を探る。

2.1 海外の研究からの示唆

第一に、英語学習に対する否定的な態度や動機について、Pedersen(2016)は、第三言語学習者の中には、新しい言語を習得するためにどれだけの努力が必要かを事前に知っているため、モチベーションが低い人もいること、第三言語学習者のモチベーションが低いために第二言語の習熟度が高くない場合、第二言語の習得プロセスに影響を与えることがあることを述べている。

第二に、Pedersen(2016)は、ノルウェーに移住して現地の学校に通う難民の中には、ノルウェー語を第二言語として、英語を第三言語として同時に学んでいる児童生徒がいるが、この2つの言語は文法的に異なるため、困難が伴う場合があり、2つの言語の文法的な要素を区別するのに苦労することもあると述べている。その結果、第一言語、第二言語を習得した後に第三言語を習得する人に比べて、両言語の学習過程の進歩が遅くなりうると言っている。

日本語指導が必要な中学生で英語が母語でない生徒は家庭や学校での生活において、母語・日本語・英語の3つの言語に触れることになる。それは日本語と英語を同時並行で学ばなければならないことに起因し、また日本語と英語では文法や発音の面で大きな違いがあるので、英語学習にあたって周りの日本語ができる生徒と比べてさらなる困りがある可能性がある。

2.2 ボランティア先での観察より

中学校1年生の英語科の授業で、席の近い周りの生徒とペアを組んで身近な事柄について聞き合い、そのことについて書き起こすという活動があった。中国から来て間もない生徒はペアを組んだ生徒にうまく質問できず、結果書き起こしに困り、周りの生徒と比べて書き起こすことができた分量がかなり少なくなってしまうという様子が見受けられた。この出来事から言えることは、日本語指導が必要な生徒は周りの生徒と同じように学習活動に参加することが難しいということである。

以上の示唆をまとめると、日本語指導が必要な中学生が在籍学級で英語を学ぶ上での障壁は、以下の通りである。

- ①日本語学習の状況が英語学習に与える情意的な影響
- ②日本語と英語の2言語を同時に学習する上での言語的な難しさ
- ③授業で行われる学習活動(特にペアワーク、グループワーク)に参加する難しさ

3. A 公立中学校での調査研究

学校現場で認識されている課題とそれを解決するための手立てを明らかにすることを目的として、第2章で述べた示唆とそれ以外の現場での課題について、日本語指導が必要な中学生(日本語・英語ともに非母語)が在籍する学級での英語科の授業担当経験のある2名(以下、A教諭・B教諭)への個別インタビュー調査を実施した。A教諭は、中国出身で来日5ヶ月程度の生徒(以下生徒甲)が在籍する中学1年生の学級の英語の授業を受け持っていた。B教諭はインタビュー時含め、これまでに受け持

ってきた、日本語指導が必要な中学生への指導経験を踏まえてインタビューにお答えいただいた。インタビューの時期は2022年12月、時間は1名につき1時間である。以下、インタビューでの語りの中から、授業内における教諭と生徒の行動や様子に関する内容を要約し考察する。

4. 考察

4.1 教科としての英語科の特異性

A教諭は、生徒甲について、「日本語も英語もどちらも勉強しなければならないという状況で、文法や発音等の言語的な面で困りがある様子は見られるか」という質問に対し、全くなく、英語に関してはそれほど苦手意識がないのではと答えた。日本人の中学1年生の生徒よりスムーズに英語学習に入れており、複数の言語を学習することによる停滞や困りに関してはないと述べた。これについて、筆者は英語科という教科の特異性によるものなのではないかと考察する。その一つに、英語科は日本語への依存度が低いことが挙げられる。佐藤(2001)は、外国人児童生徒にとって学習困難な教科について、国語に加え特に日本語の力や日本の基本的な知識を必要とする社会科をあげる教師が多いことを指摘している。英語科の授業においては日本語の力や日本についての知識がそれほどなくても学習がある程度可能であると考えられる。二点目に、外国語として英語を学習する場合、他の国においても日本と学習内容が類似している可能性が挙げられる。A教諭によれば、生徒甲は日本語ができない状態で来日したが、中学1年生程度の英語で書く力や話す力を身につけていたという。日本語の力が不十分でも、来日前に身につけていた英語力を活用しながら授業に参加できていると考えられる。

4.2 言語の壁

とは言え、英語科の授業においても言葉の壁は存在する。A教諭は、ICT端末の翻訳機能を用いて生徒甲とコミュニケーションを取ろうとしたり、日本語と中国語ができるクラスメイトに通訳を頼んで活動内容等を伝えてもらったりしているが、直接コミュニケーションを取るのが非常に難しく、生徒甲に配慮することや心情を知ることが難しいと答えた。そして、ペアワークなどの際に周りの生徒が日本語を使ってしまう時に生徒甲にとってコミュニケーションをとるのが難しいと述べた。B教諭は、英語の授業における教師側の困りとして、指示が通らないこと、教師が思っていることと違うことを生徒がやっていることであると述べた。その際は机間を回りながら様子を見て、言葉をわかりやすくして伝えると述べた。つまり、日本語指導が必要な英語非母語生徒が英語科の授業に参加するにあたって困難を感じるのは、授業の中で日本語が必要な場面である。また、教師と当該生徒の直接のやりとりが難しいため、生徒に必要な支援がわかりにくいという問題があると考えられる。

4.3 周りの生徒からの支援

A教諭は、生徒甲の母語である中国語がわからなくても積極的にコミュニケーションをとろうとする生徒が学級に多いので、教師と生徒たちでサポートすることによって、英語でのコミュニケーション活動において、生徒甲はそれほど困らずに活動に参加できると述べた。B教諭も、日本に来てから長い生徒であれば、周りのクラスメイトが教師の代わりに自然に助けてくれることがあると述べていた。つまり、グループやペアで行う学習の際、教師だけでなく周りの同じ学級の生徒からの助けがあれば、日本語指導が必要な生徒も参加していけるということである。

5. 研究の成果と今後の課題

第2章で述べた示唆①は、検証できなかった。②について、日本語と英語の2言語を同時に学習することによる困りはほとんどないことが明らかになった。英語科の特異性により他教科と比べると英語科は授業に参加しやすいと思われる。③について、授業での学習活動で日本語が使われる時に日本語の力が不十分なために参加することが難しいことが判明した。この困りは、授業での英語使用率を高めることによって解決できるのではないだろうか。オールイングリッシュの授業に可能なかぎり近づけていくことによって、日本語がわからない生徒も授業での学習活動に参加できる場面がより増えていくと言える。しかしA教諭は、学級の通常授業でオールイングリッシュの授業をすることには問題があると述べていた。このような指導法での授業の可能性については今後の課題としたい。

【引用文献】

佐藤郡衛(2001)『国際理解教育：多文化共生社会の学校づくり』明石書店

田中薫(2015)『学習力を育てる日本語指導 日本の未来を担う外国人児童・生徒のために』くろしお出版

Pedersen, L. (2016). English as a third language in Norwegian schools. A study on English teachers' multilingual competence and knowledge of third language acquisition (Master's thesis). UiT: The Arctic University of Norway. <https://munin.uit.no/handle/10037/9563>